

いつも煙が目にしみる

菱田信也

【登場人物】

1996年(平成八年) 12月

●神戸の地元新聞社社会部記者 花村健史 二十九歳

●阪神淡路大震災 被災者仮設住宅に住む女 篠田容子 三十四歳



●闇の女／二十二歳 1947年(昭和22年) 冬、神戸三宮

●新興宗教教祖の女／四十九歳 1949年(昭和24年) 盛夏、京都・東九条

●区議会議員選挙に出る女／四十歳 1947年(昭和22年) 春、東京・新宿

●農家の嫁／三十八歳 1954年(昭和29年) 初夏

兵庫県、播州のとある村

●三味線のお師匠さん／三十四歳 1955年(昭和30年) 初夏、

京都・伏見

●ストリップ小屋女主人／三十一歳 1957年(昭和32年) 春、

大阪、天王寺

《闇の女①》

1947年(昭和22年・冬)

神戸、三ノ宮。駅前、闇市のバラックの奥。

女

……ニギリメシ一個で、それ、どっいう商売しとんねん。あんたなあ、一晩ええ思いさせたつて、ニギリメシ一個もろてニコニコしてたら、それが優しいええ女やいうわけやないで。他の人間が、この先、なんでもニギリメシで仕事させられたらかなわんやろ。それ聞いた時、うち、力抜けたわ。

どこの世界にニギリ一個で二回もやらせる。パンパンがおるんや。

……あんた。三ノ宮で立つん、しばらくやめ。都合のええ女が一人おったら、他が迷惑するんや。一月へんいはヨソのシママ行つてか。

……知らんがな。一回シバかれても謝ったら済むやろ。

女、目の前の茶碗に火のついたタバコを差し込む。

《花村と容子①》

1996年12月10日。午後三時過ぎ。

神戸市郊外の被災者用仮設住宅の一室。

中央に卓袱台。

男、座って部屋の中を見回している。

男、床に置かれている雑誌を手に取ってみる。

女、お茶を出す。

花村 どうも、いただきます。

男、茶をすすめる。

女、男の前に座る。

花村 「こういふ雑誌はよく買われるんですか。

容子 ……変わってますか？

花村 いやいや。……。

僕のおじいさんに当たる人が、こういふ類の本の記者でして。
いわゆるカストリ雑誌という……。

容子 滓取り……？

花村 カストリ。

容子 おじいさんが。

花村 戦後すぐの頃は多かつたらいいですよ。カストリって安い焼酎の事で……。

1号(合)から3号くらいまでは大丈夫だけど、そこから先は危ないって。

容子 ……。

花村 ……とにかく風俗の記事ばかりで。でもかなり売れたらしいです。

戦争終わってすぐの頃にそいう雑誌が百万部も売れてたんだから。

食うや食わずでも日本人ってのは大らかかっていうか……。

容子 お茶、どうぞ。

花村 はあ。いただきます。あ。

花村、持ってきた「コンビ」袋を差し出し、卓袱台の上に置く。

花村 これ。みかんです。

花村、袋の中からみかんをひとつ取り出して見せる。

容子 みかん？

花村 (微笑み)よかつたら食べてください。

容子 (やや) 可憐いながら(あ)あじが(じ)じげ(ま)ます。

花村、ビニール袋を下に置く。

容子、受け取った名刺を手にして、

容子 社会部の花村さん……。花村健史さん。

花村 あ……。やはり静かですね、このあたり。「近所は……」。

容子 山の中だし、周りはお年寄りばかりで。

花村 仮設住宅の立地条件は、やはりどこも。

行政の対応にはどこかしら誠意のない部分といいますが、
どうも被災者側との温度差がー！。

容子 だけど、まだテント暮らしの人だって多いでしょ。だからー！。

花村 そうです、ですから。

容子 どのだって、住めるだけいいです。

花村 ……そうですか。

容子 ……なにか食べます？

花村 いや、今日は取材で寄せていただいていますから。

容子 でも、「ここ」まで来るのに時間かかったでしょう。

花村 そうですね、かなり。

容子 本当に不便だから、「ここ」。

花村 三宮を昼過ぎに出たはずなんですがー！。

容子 誰が？

花村 あ、僕です。

容子 お昼は？

花村 ……朝、食べたきりで。

容子 じゃあ、お腹すいてるべしでしょう。

花村 いや、じりめえはお話こそ。

容子 ……そうっ？

花村 あらためまして、よろしくお願いします。

容子 「こちらこそ。」

女、座りなおす。

容子 ……じゃ。

花村、抱えてきた大きなカバンをゴソゴソとかき回す。

カバンの中から、一生懸命、なにかを取り出そうとしている。

花村、やや焦りだす。

花村 すみません、ちょっとー。

容子 ……。

花村、ようやくカバンの中から一冊のノートと筆記用具を取り出す。

花村 ではー。

容子 ……はい。

《闇の女》②

女、目前に出された名刺に目をやる。

前に座っている(男)が(男)に「警へれてやる。」

名刺を手に取り、読む。

女 花村健作。……入え。えらい、可愛らしい名前やん。

……で？あんだ、うちのこと、誰に聞いてきたん。ここに私が
おきて、誰に聞いたん。……中島？……入っ、台湾人や。

どうせえらそつに。パパ。ママ。喋ったんやろ。カストリの記者
いうんはヤクザとも付き合うんか。ご熱心なこと。あんだ、酒も
入れんと、素面でようこんなどこ来たな。……取材やてー。
たいそうなごつちゃ。でっ……今日はシヨートかロンズか。
シヨートで三十円な。そんなもん話なんか聞くより、やっていった
方が早いかな。へえ。えらい堅物やな。

女、ちよつと試すやうに、

女
あんだ知つとうか。特殊慰安施設協会。
進駐軍向けにお国が金、出してできたんや。

MP相手のパンパンの元締めやがな。まあ人間の考えること
なんかいつでも一緒やわ。けど、一緒や言っても変わり身早い
わなあ。……そろ戦も負けるわい。……。

女
うちっごやで。元年生まれや。意外だっ……ほつとけ。

女
闇の女になったキツカケ？そろ食うためやろ。それしかないがな。
客？そろおるよ。白いんも大きなくろんぼもいごう。言葉？わかるか
いな。けど通じ合うもんやな。そこは人間同士や。

『おびれーすOK？』『これで一発や。意味。
おびれ？』『おびれ？』『おびれーすOK？』『言ったら、』『浜千鳥？』『いつ
て聞きよるがな。』『浜千鳥？』『……なあ。知らん。トルでおいへん……
か？そついつごやろ？お客の中に大学の先生がおってな、その人に
教えてもらたん。そろなあ、死活問題やろ。外人は、ぬかニやねん。又
カサン。抜かんと三回やりよんねん。そろ、もう、な。
……戦争も負けぬわい。』

《花村と容子②》

花村、ノートを広げ、ペンを持ち、話します。

花村 ……震災の時はどちらにおられたんですか。

容子 (煙を吐いて) 私は長田に。

花村 ……やはり、ひどかった—？

容子 みんな焼けちゃって。

花村 空襲でも受けたかって感じでした。

容子 よくわからなけれど。

花村 僕も生まれは神戸でして。

容子 どちら—？

花村 三宮です。実家は北野町で。

容子 北野でしょ。異人館のそばの。あ、おぼっちゃん？

花村 いや、そんなことありません。うちはまったく中流で。

容子 あんまり記者さんって感じじゃないですね、花村さん。

花村 それはよく言われます。

容子 地震のことで今まで会った記者の人って、みんなバリバリした人だったから。

花村 僕はバリバリしてません、か。

容子 ハイ。

花村 ハッキリ言っなあ。

容子 神戸の人って、みんな似てます。感じが……。

花村 篠田さんは—お生れは。

容子 もともとは東京です。高校一年の時、こっちに。

父親の仕事の関係で越してきて、そのまま。

花村 そうでしたか。

容子 だからね。よく、バリバリした感じの記者さんに聞かれたんです。

崩壊した神戸に、市民としてどんなお気持ちを……って。

お気持ち、って言われてもー。

花村 みんな、そういう風に聞きたがるんです。どうしてもー。

容子 花村さんは違います？

花村 違うでしょうね。テーマはー。

容子 夫婦の話、ですもんね。震災で別れた夫婦の。でしたよね。

花村 ……。

容子 では、神戸っ子のあなたが、自分の生まれた大好きな町を襲った地震の取材。いかがでした？大変だったでしょ？

花村 あれ。それは復讐、ですか。

容子 そう……。ハイ。

二人、少し笑う。

容子 さあ、どうだった？神戸生まれの新聞記者として。

花村 記者として、ですか。そうですね。ーそう、確かに「びん」が使命感がありました。

容子 ほお。使命感。

花村 いや、使命感というより、もっと別の気持ち、ですか。

容子 ほお。それは？別の気持ち、とは……ー？

花村の顔を覗き込むように見る容子。

花村 ……。なんというのか……。それは。

容子 ……。

花村 ……。いや。僕の「びん」は、もっこの入った。

容子、どこか別のところに視線をやり、じじじざんざん。

容子 ……絶対に、聞く。

花村 ……。

容子、じつと花村を見る。

花村、視線を避けるように、ノートに目を移す。

《女教祖①》

1949年(昭和24年・盛夏)

京都、東九条。女教祖の屋敷にて。

女 小山妙光と申します。神光靈感教育院長でございます。信徒の皆様からは妙光様とお呼びいただいております。

9

女 しかれどもカストリ雑誌とは……。これはまた珍なるご訪問……。わたくしどもの修養がなぜにエログロのご本にて取り扱われるやと。信徒さん？京都だけではぼ一万人にございますれば。これすべて女人。男子禁制。

わが教育院にご神体なるものはございません。あえて崇拜するとしますれば、この妙光めを像に見立てたアミダ様のみにごございます。

女 いかにも。わが教育院のご信徒は九割が戦争未亡人となりし女人ばかり。

ご祈祷の手順……。そう。それは一胴上げ。ご信徒の女人方が……。こう……。薄い白妙を身につけ……。ご声明を唱えつつ……。ワッショイワッショイとお互いを胴上げ。ごうあげ。

……胴上げ、わからんか？

女教祖、やおら立ち上がり

女

「うう……。これ、見よじつ。ナンマイダナンマイダ……。

ワッショイワッショイ。ワッショイワッショイ……。

ああ、ナンマイダーナンマイダー。ワッショイワッショイ……。

一人、胴上げの様子を見せ続ける女教祖。

《闇の女③》

女

好き？……なにが。あれがが。あんだ、なんちゅうこと聞くんや。好きでも好きやて言えるかい……。あんなもん、……好きやいうてするもんやないやん。ああ、なるほどなあ。これだけ……。パン助がおるんやからなあ。女でも、あれが好きやなやつおるんかて、それが聞きたいん。そらあ、……。おにぎり一個でやらせる女もおるんやから。好きでやつとこのんもおるやろなあ。

まあ……。神戸も焼けてしもてなあ。なんもかも、なくなったん見た時に、そらもう、どつでもええわあ……。てな気になったんかもなあ。だいたいやで、あれが好きやなんていう女、それでもう人生、捨てとぅわな。……。あんなあ、ニーちゃん。人様にはなあ、そこの犬猫と違つて、恥、ちうもんがあるんや。な、これなくしたら畜生と一緒！

《花村と容子③》

花村

震災を境に、急転していった運命をテーマに取材をしています。

容子

……それで私に、なにかおもしろいことやありませんか？

花村 離婚されたのは、昨年の9月と。

容子 はい。――夏が過ぎて、ちよつと落ち着いた頃。

花村 破壊された後にはまた建物が立つ。

容子 ……。

花村 しかしそうではなかったものを。そういう「事情をお聞かせ

いただきたくて。大変、失礼なようですが。

容子 大丈夫。私は明るしいし。

花村 そうですね。「印象が明るいは、幸いです。

容子 私みtainの震災離婚っていうのよね。

花村 二次災害、ですね。

容子 ……。

容子、少し笑う。

容子 花村さんって、結構、冗談とか言うんだ。

花村 ……いや、恐縮です。

容子 (笑いながら)面白くはないけど。

花村 ……。

いたずらっぽく笑う、容子。

《区議会議員選挙に出る女》①《

1947年(昭和22年) 春、東京・新宿の雑居ビルの一室に

立つ女、名刺を見ながら

女 花村健作。ふん。君かね。私に話を聞きたいというのは。雑誌の記者だ

なんていうからどんなむさ苦しい男かと思ったが、なかなか男前じゃないか。ああん？

いや……。朝からね。支援者の方にいろいろ会っておいてね。まったくもって忙しいなんてもんじゃない。

まあ、なんだな。新しい民主主義政治に、大きな期待を寄せておられる婦女子はこれはもう想像以上の数だな。

君のところの雑誌はなんだね、しゃにむに女の裸ばかり載せているらしいが。それもまた新しい民主の息吹きというやつだ。あの暗い時代のことを思えば、それはもう天国だ。

気に入った。いや私もね。来るべき区議会議員選挙に向けて日夜奮闘努力、寝る間も惜しんで活動しておるがね。今日は胸襟を開いて君と語り合おうじゃないか。時間など構わないよ、君が聞きたいだけ聞き給え。

佐藤くん……この記者くんは寿司でも取って差し上げなさい。

いや、かまわんよ、君。銀シャリの寿司なんか、安月給では口にできんだろうが。

佐藤くんー松を二人前だよ。松だ、松！

部屋を出ていく佐藤を見やりながら

……彼は秘書だ。うむ。二十四歳でね。ん？……ハハハハッハ。

若い男はいいよ。君。なんというのか……。うん？まあ、栄養剤のようなものだな。

女、大きく笑い

女

……君、松でいいよな？

女、椅子に座り、葉巻に火をつけ、大きく煙を吐き出す。

《花村と容子④》

容子 あかね、聞いてもいいですか。

花村 ……はい。

容子 いつもそんな大きなカバン、持ち歩くんですか？

花村 カバン、ですか？いや、普通、新聞記者はこんなに荷物、

持ち歩かないんです。カメラマンが同行しない時に、カメラを入れて

おくくらいで。あとはなにか特別な時とか……。

容子 じゃあ、今日は特別？

花村 いや、そういうわけじゃ……。……あ、特別は特別です、今日の取材。

容子 (試すように) ホントに？

花村 なんていうのか、その……。

容子 さあ、なんて答えます？

花村 震災のあとから——やたらと増えたんです、持ち物が。

容子 なに入れてるか、教えて。

花村、少し考え、

花村 お守り、みたいなもんかな。

容子 お守り？

花村、カバンの中から何冊かノートを取り出し、

卓袱台の上で置く。

花村 ノートです、取材用の。……これまで書いてきたものが溜りに

溜まっちゃって。会社や自分の部屋に置いておくのが、どうも——

なんだか不安で。財産みたいなものです。

格好付けるようにですが、やっぱり命を回して置くくらい。

容子、大事そうに、手に取ってみる。

容子 大事なもの、か。

容子、別の古いノートを取って、

容子 これって、化粧品のラベル？

その古いノートには、何枚も古い化粧品のラベルが貼ってある。

花村 白粉(おしろい)です。

容子 コレクションしているの？

花村 あ、集めてたのは祖父で。

容子 祖父？おじいさん？

花村 じいさんの残した荷物の中に、白粉のケースがいくつかあって。

どうも、取材やらなんやらで—付き合いのあった女性のものばかり。隠れて集めてたらしいって。

容子 ……。

花村 じいさんが亡くなったあとに、遺品の中から親父が見つけて。

……ラベルだけ剥がして自分の取材ノートに貼りつけたんです。

容子 取材ノート？

花村 はい、親父も—。

容子 お父さんも、新聞記者？

花村 そうです。

容子 おじいさんも、だったよね。

花村 カストリ雑誌、ですが。

容子、ノートをじっと見つめている。

花村 だからまあ、お守り……ですか、ね。

容子 ……。

花村 本当はちょっと抵抗があるんですが――親父の取材ノートを読んでもいい、
なにかと参考になることもあるんです。それで、たまに、読み返したり
し……。

容子、ノートを大事そうに置いて。

花村、ノートをカバンの中に。

容子 ねえ、私。……お腹すいたの。起きたのが遅くて。

花村 ……はあ。

容子 出前、取らない？

花村 あの、では僕が、馳走します。

容子 やった。中華でいい？

花村 はあ。……しかっこいい？

容子 来てくれるわよね、一応。ただちょっと時間かかるのよ。

ラーメンとかはダメ。のびちゃん。

出前のメニューを取り出す。

容子 なににするの？あ、でも、新聞の記者さんって外食が

多いんじゃない？やっぱり作った方がいい？

花村 いや、そんなお気遣いなく。

容子 じゃ、中華でいいね？なににするの？

花村 あの、では、チャーハンで。

容子 私は、ラーメン。

花村 え、ラーメンですか？

容子 のびちゃったラーメン、好きなの。

花村 ……。

容子、少し微笑んだ。

容子 出前頼んでくるね。ちょっと待っていて。いい？

女、外へ出て行くとする。

花村 あの。

容子 うち、電話ないの。すぐに来るからー待っていて。ね？

花村が立ちあがるのを見て命令口調で、

容子 いなない、そりゃ。ちやんご。

花村 ……。

容子、笑い、部屋を出ていく。

花村、立ち上がり、懐からタバコを出して火をつける。

明りが、花村一人を、浮かび上がらせ、

やがて、ゆっくり暗くなっていく。

《農家の嫁①》

初夏の昼間、あぶら蟬の鳴く声が聞こえてくる。

布団で寝ていた女がゆっくり起き上がる。

一九五四年(昭和29年)
兵庫県、播州のとある村、農家の奥間。

女、枕元に置かれた名刺を手取る。

女
雑誌の記者、記者様でございますか。これは……。
わびわび、こんな田舎までおしじいだいて……。いえ、平気でございます。
そんな、記者の先生様に不調法なことをいたしました。いえ、いえ……。
平気でございます。……。

女、名刺をじっと見つめて

女
「月刊」……。えろちつく。ていつく……。……テック……。……
はあ。え……。……エロテック、チックでございますか？
えろ、ていつく、それはそれは……。……」月刊「エロチック」の花村健作先生。
先生、こんなところまでわびわび……。いえいえそんな。雑誌の記者様
でございますの。お茶を……。お茶。……。

女、部屋の外を伺い

女
すべにお茶の「用意を。

女、立ち上がるうとするが立てない

女
いえ、いえ、あの、花村先生。いえ、そんな、とんでもない。
“先生”でございます。“先生”でございますから。

女、しらみをついたため息をいつくす

女
……。はい、まだ、動き回りますと難儀でございます。……
私共のような百姓は朝が早くございますの。……
……。おかげさまで稲は夏前に植えよりまして。今の時期は……。
ええ……。家の者は、年寄りもみな、畑に。
……。百姓の嫁が。「こんな口の高いうちから横になつて……。
そら百姓同士の付け合ひもございません……。……。
いえいえ、それはもう、百姓が。

百姓じときが、こんな……。ですから、あのこの嫁は……。と。
先生は、こんな水呑み百姓しかいない村にも、よくおいで……。？
はあ。エロチックの取材でございませうものね。
えっ……。エロ、テック？

《区議会議員選挙に出る女②》

女

で……。だ。君がなぜゆえに私のところに来たかわたしはわたしなりに承知しておるつもりだよ。君は私の選挙公約を知っておるのだろっ。そうとも。女の性という見地から見た真の解放を唱えておるこのわたしの訴えをより深く理解せんという目的だろっ。いかにも。女性問題は女性でもってしか解決することほできん。そうだな。まずは売春問題だ。いいかね。女が身体を売って糧を得る。人類最古の職業は売春だといっても過言じゃない。男が……。女がいる。それで交渉が持たれるというのは実に自然の成り行きだ。しかし、だからと言って、それを金糸にて売り買ひするやうにとする問題が生じる。いいかね。性というものはまずもって二つの問題点がある。ひとつ。男女の数が均等でない。ふたつ。男女の性欲には差がある。この二点を解消せん限り、売春というものがこの世から消えぬやうにするはなら……。もしもこれをなくしたいやうにするなら……。
「さしおまじいでもだれじいでも性交してよ」やうな法律を作らねばならんー私はそれを訴えておるー
そうとも。区議会では「性交渉解放条令」制定を進行するつもりで
おのー

ハハハ。ハハハハハ！

女、ふと顔を上げ

女

……首でございいますか？

……首は。おかげでまで、残っております。

裏の神社の……。お稲荷さんの境内の木に縄をかけて、首を。

吊った時には……。ああ、首が取れたと思つたのですが……。

ございしました。じつじつ、恥晒しでございいます。そら村中の……。

ただでさえ、村の鎮守の稲荷で首吊るだけでえらい罰当たりや

いづのに。—死にきれなんだやなんて。

主人の親からも、じつわく(腹が立つ)、なんで死によらんかったと。

鎮守で首なんぞ吊るしよつて、落ちて拳句に死なれなんだ嫁など、

などいや(何事だ)、恥ずかしくて村の道など歩かせれんと。

そら死によればよかつたと思つのは、わたしも同じでございいます。

神社の木で……。大女が首をつつて、拳句に死なれなんだやなんて。

ほんま(笑いながら)、ああ、死によればよかつたものを……！

やがて笑いが消える。

女

……。ミス・コンテスタは、二階町のまじりの口。

お城のまつりも兼ねておりよりました。広場に櫓を組みよりまして。

なんや、えらい人が集まりよりまして。ほれ、伊東絹子がミス・

コンテスタになりよりましてよつて。

うちは……。わたしは、勝てたと思っております。うちは伊東絹子より、

一尺ほども背え、高い。そやみよつて。うちは勝てると思ひよりました。

コンテスタは……。

逆立ちでございいます。ミス・逆立ち。

櫓の上で、女が順番に逆立ちしよります、その中で一番、ミス・

ふたわしい逆立ちしたものに、お客が投票しよるんです。

逆立ちというのは首逆立ちです。こんな。首で。逆立ちほ。こんな……！

女、逆立ちをしよつとして咳き込み、

布団に突つ伏す。

させたい、いうのは情けや思います。けど……。ミス・ユニバース
第三位の伊東絹子が五尺半、うちは五尺六寸、家具屋の娘は四尺半。

……男連中いうんは、坊瀬(ぼうせ)ほうぜ(の漁師)らの。

そつです、おまえに票、入れたる、て。そやから、うちは男連中に……。
あの連中の言いはるままじー

女、正座すん。

女

先生ー花村健作先生ー!

うちの逆立ち、こいでちゃんて見やつてもうえませんやろうか。

うちは、誰よりも、ええ逆立ちをしてミスになるんやったんです。

逆立ちの「リテラストなんや」。逆立ちで票をもらうんが筋やないですか。

そやないて、ほんまのミスやあらんやないですか。

うち、やります。こいで、こいで、こいで、見てもうえませんやろうか。

花村先生ーうちの、うちの逆立ちをー!

女、逆立ちを続けるが、形が崩れる。

いきなり号泣する、女。

女

(泣きながら)うちはー。うちはー!

逆立ちで勝たんと、ほかになんで人から認められるんぞー!

「こないな田舎の百姓に嫁いでまてからずじー」。

「こんなとこで死んだみたいに暮らしててお母もなまもんの」。

……もしも。もしも、やー!

もし、今、うちの人が生きて復讐してきたらどないしますのー!

うち、死ぬまで、こんな田舎で飼いやないですか。

いやや。もう、こんないやや……。……。

そやから、なんとしてー!

はよ。はよ、先生ーうちの逆立ち、見やつてー!

うちがほんまに一番の逆立ちやて、その「本」に、月刊エロチックに
書いて、日本中に知らせてあげたい、花村先生ー!

卓袱台の上に、出前で取った中華料理が並んでいる。

花村と容子、向かい合って座り、食事。容子は旺盛な食欲を見せるが、花村は居心地がやや悪そうである。

容子 おじいさんがカストリ雑誌で、息子と孫が新聞記者。

花村 父は政治部で……僕はあんまり肌が合わなくて。

容子 同じ新聞記者なの？

花村 親父はエリートでしたから。僕なんか認めてなかったんですよ。

容子 おじいさんって、いつ亡くなったの。

花村 僕が小学生の時に……。東京で……死んだって報せがが来た時、親父が行って骨だけ引き取ったんです。……祖父は戦後すぐの頃、京都の、

芸者あがりの女性と突然、日本一周旅行に行ってみたりね。

奥さん放つたらかしで。

容子 (笑って)……。

花村 ……でも不思議です。

容子 どうして？

花村 なんで親父は認めたのかって。エリートの親父がカストリ雑誌のゴシップ記者だった祖父を……。

僕が記者になった時『親父が生きていればなあ』って。おまえみたいなヤツにはためになつたらうらやましい。

容子 ……。

花村 まあ——今頃一緒に、酒でも呑んでるんでしょ。出来の悪い孫の話、肴にしてー。

容子 あ。……じゃあ、お父さんも。

花村 はい。三月(みつき)前に。

容子 ……。

花村 震災のあとは、なんだかやたらとあちこち走り回って。そうですね、

最後にプツンって電池が切れた—どうも、そんな感じでした。

容子 でも、残念ね。

花村 残念、とは？

容子 だって、ためになる先輩が二人して—。

花村 そんな。ためになんか……。時代も考え方も違いますし。

容子 女の扱い方じゃない？

花村 いや、そういうのは関係ないですよ。

容子 花村さんって、手、キレイよね。

花村 えっ、そうですか？

容子 目にしろのよ、そういうの。

花村 新聞記者らしくないと言われたことが—。

容子 キレイ、すいへ。

容子、花村の手を取る。

容子 女の子の手、みたい。

花村 ……。そうですか？

容子、手を離す。

花村、チャーハンを食べる。

容子 ねえ。べつとして物食へる時にロロ元、手で押されるの…

花村 え。いやあ。………いつの間にか。

容子 イヤらしい。それ。

花村 え、イヤらしい？

容子 (笑って) 必死で欲望抑えてると、仕事に出ちゃうから。

花村 いや、もう、まじったなあ。やじこいへんていよめ。

容子 やりにくくはないのよ。

花村 だって、まるであなたにいいようにされて。ペースに乗せられて。

僕は話を聞きに来て、気がついたら一緒に出前のチャーハンを食べる質問責めに合ってる。その上、深層心理のレクチャーまで

聞く羽目だ……。

容子 おじいちゃんなら、「いついつ女はどつ扱ったかな？」

花村 ……。

容子、箸を動かせる。花村、残っているチャーハンに

レンジを付ける。

二人、黙って、食事を進める。

《闇の女④》

女 そやけど、いつまでもこんなマネしてたら。ほんまになあ。うち、21で商売やりはじめた時にな、ネエサンからヤキ入れられた事あるんやで。うちの客取った、言うてな。それで焼け火鉢、あそこに突っ込まれそうになったんやけど。客の男がな、助けてくれてな。けど、なんや腹立つてな。なに邪魔しとっねん言うて、その男、殴り付けたんや。さあ。……なんでやろうなあ。

《女教祖②》

女 ナンマイダナンマイダ……。ワッショイワッショイ。

ワッショイワッショイ。ナンマイダーナンマイダー。

ワッショイワッショイ……。

女教祖の荒い息が響く。

《区議会議員選挙に出る女④》

女

寿司が遅いな、寿司が！佐藤くん！テツ！
テツ。……遅いね。電話したのかい？それにしたって
遅いじゃないか。なんだい？金？

やだねえ、昨日、渡してあるじゃあないか。

また遊んだね？今度はどこのスケだい？

いいさ、あんたがそのつもりなら。……ちよつと、あんた！。

女、自分を見つめる花村を見て

女

……なんだいアンタ。

なんかわたしの顔についてるかい？

なんだい、そのイヤらしい目つきは……！

そんな目で人のこと、見るんじゃないよ……！

《農家の嫁④》

女

先生！戦争が済んだら、みな自由になるんじゃないんですか！

先生みたいな記者の先生様は、さんざん新聞に書いておったやない
ですか。そやからうちかて、絶対、ミスになれるんや。

死ねなんだんは、ミスになれるからや、神さんがそない決めて
はるからやないですか。

そやからほら、先生、見てください、逆立ち。うちの……。

お願い、書いて、先生。うちのこと……！

《区議会議員選挙に出る女⑤》

女

人間のさ、これは自然な行為なんだ。見るおまえさんの心が
イヤらしいから、イヤらしく見えるんだつ。いいかい？

そついうイヤらしい考え方の人間がいる限り、この世から

決して売春はなくならない！

そつだろー？

《闇の女⑤》

闇の女、ふと、顔を上げ。

女　—で？

女、懐から短銃を出し、銃口を花村(祖父)に前に向ける。

女　—ショートか。ロングか。

微笑みを浮かべる、女。

《花村と容子⑥》

容子　一軒隣のおばあちゃんがね……一度、お赤飯炊いたって言って持って来てくれたのね。おばあちゃん、なにかお祝いですかって聞いたら、亡くなった息子さんのお誕生日だって。息子さん、戦争で亡くなったって。

花村　……。

容子　すごいよね。おばあちゃん、毎年決まった日にお赤飯炊いてたんだ。

戦争終わってからも、ずっと。地震で家もみんな無くした年でも、息子さんの誕生日にはちゃんとお赤飯炊くんだね。まだ三月だった。……仮設に入ってから、日も浅いのよ。

花村　……。

容子　親子の絆ってそれだけ時間が経っても変わらないんだね。

花村　だって世の中の繋がりがなんか、一回の震度7でパーになるのにな。では、話を戻しますが……。その人にくらべて篠田さんは、というと。そりゃあ……。だってあれさえなかったら私はずっと……。

花村　幸せだった？

間。

容子 ……幸せの…。尺度って？

花村 え？

容子 幸せとか不幸せの基準ってなに……？

花村 ……つまり。

容子 不幸せそうに見えた？地震が来て、家を無くして……、旦那と別れて、仮設に一人で住んでる女は不幸せに見えた？

花村 失礼しました、別にそういう意味で言ったんじゃないやありません。軽率な……
言い方でした。

容子 怒ってないよ、別に。

花村 ……つまり。

容子 違うの、不思議なのよ。自分でも……お赤飯持ってきた時のおばあちゃんも……戦争で息子さん亡くすのも、地震で家無くすのもきつと同じでしょう？でも、おばあちゃんの顔は幸せそうだった。なんでかな？
なっどっと思っ？

花村 こういう時、女性は強いなど……。

容子 でも、おばあちゃん、そのすぐあとに死んだよ。

花村 ……。

容子 一週間ほど顔見ないなと思ったら……。孤独死ってやつ？

花村 ……。

容子 どっちになる？幸せか、不幸せか。

花村 ……。

容子 他人が見たら不幸せかな。でも、死ぬ寸前まで大切な思いをしつかり持つ
たままだったんだから……。

花村 では……、あなたは？

容子 私は……。

花村 今のあなたは。

容子 私は自由にはなった。

花村 その自由というのは何に対してですか。

容子 ……。

花村 たとえばすべての人間が、必ずなにかに縛られていないこと。

……あるいは地震によつて、むじつ自由を手に入れたとは――。

容子 死んだ人、六千人でしょ？

花村 ……。

容子 それで幸せだとは、絶対に言えない。

花村 ……あの。

容子 自由になったから幸せだとは思えないもん。絶対に……。

花村 ……。

静かに暗くなつていく。

《三味線の女》

1955年(昭和30年・初夏)、京都・伏見の一軒家、居間。

薄闇の中に和服の女が座っている。

女は黒いサングラスをしている。

女 生まれは……物集女(もずめ)です。14で座敷に上がって……。大戦

前まで祇園に出しておいた。売れっこやいっほぐではお入んどしたけど、

まあ景気はよろしおしたからなあ。軍人さんは、えろっ羽振りよろし

おしたえ……。あの頃の勢い見ておしたら、おや、戦争にも勝つんや

ないかて、呑気に思つてましたけど。

どないなるんやろて、三味線弾きながら毎日、考えました。けど、三味

線弾いてばかりでも、どないもこないもならしまへんものなあ……。。

ハハハハハ。ハハ……、
香気な、なあ……て。

女、三味線をつまびく。

女

お宅はんは、うちらみみたいなもんの話聞いて、それを文章にしゃはるんどつしゃる。作家はんていうんどすか。オダサクとかとは違うのどすか。……織田……、サクはん。はて。……下のお名前……。そう。サクノスケはん。へえ。1〜2度なあ。菊池センセとかも、ようお会いしましたで。キクチ。……カン下のお名前なんか、うち、よう覚えてまへんわ。あんまりようできた芸子やおへんどしたからなあ。器量だけの子やいうて……。ハハ……ハハハハ……。

女、どこか遠くを見ている。

女

新聞？……。はあ。載っておったんどすか。お宅はん、読みはったんどすか。別に……。大したことやおへんになあ。さあ……。うち、ほんまにわからんのでせ。何がどないしてああなったんか。うちはなあ、……。ただ、普通に風呂に入ろうと思つて……。いつも通り、桶と手ぬぐいを持って、外に出たんどす。

夕焼けがえらい綺麗どしたわ。それだけ、覚えてます。西の方があかに……。光つてて。あらあ……。、こんなん見るん、久しぶりやなあ、て。背中がなあ、なんか空の赤さに染められてしもつて、ハハハハ……。こらあかんわ、て。なんや、そない思つたんをなあ……。

夕焼けが広がっていく。

女は、東の方を見つめている。

真つ赤な空。静かに空襲警報が鳴り響く。

やがて警報は、ひんがしの蝉時雨に変わっていく。

そして深い闇が広がる。

女

……ふうつと気が、しいたらなあ。なんや……、おかしいのですわ。

なにがて、ようわからんのやけど。居心地悪いなあ、て。あらあ、と思
うたらなあ、お湯に入ってますのん。うち、お風呂屋のお湯の中にお
りましてん。そやけど、なんやおかしい。よう見たら風呂屋がいつも
の風呂屋やお入ん……。それになあ、まわりのおなじしの使いやる、
言葉がなあ、なんか聞き慣れんいうんか……。

『たまんないよお……』

『まったくやんちまじよおお……』

うちなあ、いつの間にかやら、浅草のお風呂に入りましたんえ。

ハ。ハハハハハハハ……。

指が、三味線をなでる。

女

わかりま入んのどす。警察に行きましてなあ、今、何曜どっしやろて聞
いたら、うちが深草の家出てから、三日、経ってましたんや。その間に
どないして東京まで行って、浅草の風呂でノンドリ、湯につかっとた
んか、なあんも覚えてませんのどす。深草から浅草へ。そら、よう似て
ますけどもなあ。それにしたっておかしなこと……あるんやなあて。

女

東の方角？はあ、なるほどなあ。西の夕焼けから逃げなあかんわ思て

東に行つてもたんどすか。ハハハハ。

そら、よろしおすなあ。ハハハハハハ……。

笑てられ入んのどすけどなあ。

三味線をつまびき出す。

女　なんかなあ……。あれ以来、風呂行くが怖あてなあ。そんなもん、今度
は四国とかにおったらいやどっしやる。なんぼ無意識やいっても限度
がおますわなあ。

女、手を止めて、

女　逃げたい？うちがどすか。別に……借金もおへんからなあ。なんでも
しやるなあ。お風呂に行きたいだけなんどすけどなあ。
不安？なににどす？勝手にさっさっしてしますよどすか。
なにか他に？気持ちの中で。不安なあ。そあ……。
明日、どないしよて思っことはおますけどなあ。
ハハハハハ……。ハハ……。香気な……。なあ……。て。

三味線をつまびく、女。

ゆっくり暗くなる。

《花村と容子の⑦》

夜。

何杯目のコーヒーに口をつける花村。

花村　本当は、篠田さんにも……。聞いてもいいのか、なんて。

容子　私に。

花村　はい。

容子　私はいいですよ。大丈夫。だって、花村さん、使命感あったんでしょ。

花村　いや。使命感じゃないんです。

容子 あ。別の気持ち……。

花村、考え、意を決して、

花村 —理不尽だ、と。

容子 ……。

花村 ……よりもよくなって、なんで神戸に、と。

容子 ……。

花村 この街は破壊されていい街じゃない。こんな理不尽なことはない。

そう思ったんです。

容子 ……。

花村 神戸には—山があつて、海があつて。静かで、穏やかで。だけど都会的で、流行に敏感で。でも、それだけじゃない、昔からの、ちゃんとした人の暮らしが根付いていて、つまりここは……人が住む街だ、と。

容子 ……。

花村 なのに。なんで、よりもよくなって、神戸が。

容子 ……。

花村 ここは、こんなことになっていい場所じゃないんだと。

容子 それが、理不尽？

花村 ……。あの日。そう、思いました。

容子 ……。

花村 個人的な—感情です。

容子、少し笑い、

容子 みんな、自分の街のこと、そう思っているよ。

花村 ……。

容子 お返しに。私も。

花村、ノートを開き、ペンを取る。

容子 ……離婚しようと思ったのは、フッと気がついたから。ああ、私は……この人とは死ねないなあ、って。

花村 死ねない—？

間。

花村 震災の時は「一緒だったんですよ」…

容子 ドーンと下から突き上げられて、ベットから投げ出されて……でも旦那が上から覆いかぶさってくれたのよ。

花村 ……とっさにっそれでも、「この人とは死ねない」…

容子 感謝は、しました。

花村 なのに、一緒には死ねない。なぜそう思ったんですか。

容子 ……。思ったのは、ひと月くらい経ってから。

花村 キツカケは。

容子 ……。

花村 震災後、一か月といえば、精神的に一番、キツイ頃ですよ。

地震が来た瞬間に身を挺して守ってくれた夫に、あなたは違和感を感じた。

容子 満たされてはいたのよ、それは……。セックスだけは。

花村 ……。

容子 あの頃……。毎日……。ただボンヤリと……。ただ時間だけがあつて…

近所もみんな焼けちゃったから、やけに空が広く感じて……。朝が来て一日が始まって。気がついたら真っ暗な夜が来て。自分の指先もよく

見えないの。二人つきりでいても、話すことがないの。だから、

ぐっしょいもなくて……。毎晩よ、毎晩。もう……。小学校の教室に

避難してたけど、車に乗ってあっちこっちのホテルで……。

大阪の方にも出ていったんだから。何時間もかけて。行けばお風呂にも入れるじゃない。結婚して五年経つけど、新婚以来よ、あんなに一生懸命……。

花村 ……。

容子 でも、……終わったあとは何も話さず、黙って帰ってきて、また教室の隅の毛布にくるまって寝ちゃうだけ。天井見ながら、ボンヤリ考えた。この人と私は、なにかも違うんだって、はじめて気付いた。普通の暮らししてた時は、それを知ってはいいても、考えようとは思わなかったのに。

花村 地震が来て、はじめて気がついた。

容子 だって、なんで一緒にいたんだろうって思うと……。

花村 ご主人には話されたんですか。

容子 体育館の隅で、離婚届を私が出して。

花村 ……。なにがなんだかわからないって。

花村 ……。

容子 あんなことおこえなかったら、あのままだったかな。

容子 ずっとあのまま暮らしてたのかな、あの人と。

問。

容子 あ、そうだ。—あの時。

花村 ……。あの時？

時間がゆっくりとながれていく。

容子 三日月にね。地震があつて三日月に、私たち三宮に行ったの。

花村 ……。

容子 東門に旦那の友達があつたバーがあつたから、様子を見るに。

でも、私は旦那から離れて、一人で東急ハンズの前に出たの。

花村 三日目って、……まだ。

容子 誰もいなかった。

花村 ……。

容子 あんなに、いつだって人が溢れてた場所なのに。ハンズの前
の交差点に私一人で立って……。その時、私。

セットが崩れてるって思ったの。

花村 ……。

容子 まるで映画のセットが……。なにか事故が起きて、セットが崩れて、
撮影がストップしたような。私はそのド真ん中で、崩れたセットを
じつと見ながら、なんだか、もの凄く気分がよかったの。

自分が、映画の主人公になれたような気がして……。

花村 ……。

容子 セットなんていつだって元に戻せるわよ。大丈夫。

セットなんて。そんなことより、私は今、主人公なんだ。

また元に戻ったら——たった一人で——私の映画を——。

そう思った時に、旦那が帰ってきたの。

「帰るぞ」って……。

花村 ……。

容子 あ……。私の相手役は——この人なんだ。

花村 ……。

容子 気がついた。その時。その事に、初めて。

花村 ……。

容子、別の場所を見る。

容子 そもそも……。私はどこにいたんだろう……。

花村 ……。

容子 ……なんですか。

なんで、—あのままにじといてくれなかったのかな。

容子、あの時を見ている。

間。

花村、ふと立ち上がり、

花村 ところどころ。

花村、腕時計を見る仕草。

容子 晩ごはん、食べていかない？

花村 ……いえ、今日はこれです。

容子 帰る？

花村 タクシー呼びます。

容子 来るまで時間、かかるよ。

花村 あの、……ちよつと歩きます、頭の中、整理しながら。

容子 あんまりいい取材にならなかった？

花村 いえ。そんなことありません。

容子、そばに立ち、

容子 「満足でした？」

花村 はい。今日は—ありがとうございました。

花村、ハンカチを出して額にぬぐっている。

容子 私ね。

花村 ……。

容子 今は、ほんとに毎日、楽しくしゃつてるのよ。

花村 ……。

容子 ジャズダンスの教室にも通つて。昨日も！

……ステップ、ひとつ覚えて……。ほら。

容子、ステップを踏む。

容子 ころう……。こんな……。私、音感悪いから、覚えが悪いの。先生はカウントで踊るんだけど、私は順番にね……。ころう、こんな……。

容子、楽しそうに踊って見せる。

容子 やってみる？

花村 いや。ボクは……。

容子 教えてあげるから。

花村 ボクは音感、ないですから。

容子 私もだつて。教えてあげる、ホラ。

容子、花村の手を取る。

花村 いや、いごびますして。

容子 出来るよ、ころうちして……。

花村 いや、その……。そっころう？

容子 右、右……回して。

花村 いや、ダメだな。

容子 だから……ころう。

容子、花村の体に触れる。

花村 ……あの。

容子 ……「じつはさ。もっと」……。

花村 ……あ。

容子 もっと、ほろび……。足を……。動いて、もっと……。

花村 あ。

ステップを繰り返す二人を見つめる女。

女 ……違う……もっと……もっとちゃんと踊れんか……？

容子と花村、やがて消えていく。

《ストリップ小屋女主人》

1957年(昭和32年・春)

大阪、天王寺の小さなストリップ小屋。

女 あんたら、なんべんやらせたらまともにならねんや、腰を……、

「じつはさ。バターフライをもっとでっぴらでっぴらさせてやな。イヤらしい腰の回
方、考えんかいなつ。ほんまになんべん言うたらわかるんや。下すけ
べな男が振りなんかいちいち見てるかいな。……立たせるために腰、
振るんや。そんなお上品な踊りで男が立つか？もっと卑猥にやな……。

「じつはさ……」……あんたら、特出しするか？股おっぴろげて、かぶ
りしきのオッサンらに全部、見せてくれるんか。イヤやろ？ほな踊り
なせしとイヤやろしとナを吐くじつはさ。

女、座る。

女

……ほんまに、シヨウのやり方をしらん娘ばっかりで困りますわ。客がなにを見たいか、ちゅうことをまるでわかっくらん。

客が見たいんは、女のおそこがどうなってるかや。・

……私はなあ、神戸の新開地にいてましてん。横文字でマネエジャアやな。漫才やら、浪花節の芸人の出番をやりくりしたりな、太郎、決めたりしてましたんや。あ？太郎ちゅうたら、給金のこと。活動に、芝居に浪花節に女剣豪な。そらあ。……あの頃は華やかでしたわ。

女、煙管くわえて、

女

うちはもともと、田舎の祭り芝居に口出してるんが好きでなあ、衣装縫うたり、立ち回りの動きつけたりな。まだ、14,5の時やで、けどな、私、もうちよつとで達磨屋に買われて、置屋に連れて

いかれそうになってなあ。そらあ、村のおなごはみなそつやったで。うちとこかて、子沢山の12人や。私は下から三番目。そんなもんかなわんわ。生むだけ生んで、困ったから

口べらしするやなんてな、なんほ親でも勝手やがな！

それでな、16の時に一人で……そつや、勝手に村出て、神戸に行きましてん。あの時代にそんなマネするん、

ま、私らくらいのもんでっしやるな。親？知らん。

十三人目が生まれたいうんは、なんや手紙で読んだだけど。

……犬猫やないんやから。生みやええってなもんやないわな。

まあ、芸子なるんは、妹あたりが引き受けてくれてまっしやる。

ハハ。ハハハハ……。

女

……この小屋？はあ、戦後のあとすべにな、

神戸の時から世話になつた興行主に任されてなあ。

ほつたらかしゃから、どうや、て。そらあなあ、なんもかんものうなつてしもうて、食うもの事、考えるのが先決やけど、

やつぱり血、やね。小屋に入つて、またお客がぎょうさん入つて……、そんなん考えただけでな、よし、やつたらか、て。

私は根つから興行が好きやさかい。人間を動かして

物作るんが好きやさかい。まあ、今はな。……

女の裸でこはん食べてますけどな。いや、ストリップかて

立派なシヨウヤ。そらあ、あんた。女子の裸が生で見れますのやで！
食べることに精一杯でも、不思議やなあ、男はもう血眼になつて小屋
に来よるからなあ。へへへへ。

それでな、私もいろいろ考えましたがなー『入浴シヨウ』

いっんでっけどな。

そう。舞台上に風呂桶置いてな、女の子、風呂に入れますねん。それで、
別料金払つた客に、女の背中、流させてな。当たつたがなーそらバカ
当たりもう、押すな押すなの大騒ぎー大のオトナの男が……手ぬぐい
持つてズラ〜ツと並んでなあ。けつたいな風景やつたわ。ははははは。

女、茶をすすり、一息ついて、

女

えう……最後に一言？読者に一言、でつか。はあ、そうやなあ。

やつぱり華を作りたいなあ。戦争でなんもかんものうなつてな。それで
も生き残つてなあ。あの時な。もう一日、空襲続いてたら、死んでたか
も知らんのやしな。なんや、生かされたようなもんや。そやからなあ。
そやから。うん。それにお客かておらんようになつたわけやないから。
焼野原に大きな花を咲かせたい。この手でなあ。銀幕のスタア……。ス
テージの華。私がこの手でなあ。育ててみたいわなあ。うん。……。

女、笑い切って、

女 ……。あんじょう、きばってな！

女、笑顔で手を振って見せる。
ゆっくり消えていく、女主人。

《花村と容子⑧》

花村 ……あの。

容子 はい？

花村 ……あとひとつだけ、聞いてもいいですか。

容子 ……。

花村 これは記事にはしません。ただ、個人的にお聞きしたくて。
容子 ……。……どうぞ。

花村、少し間を開け、やがて口を開く。

花村 ……後悔していませんか。

容子 ……。

花村 離婚して、一人になって……。

容子 ……。

花村 寂しとか、切なとか。

容子 ……。

間。

容子 ……。

花村 例えば……とり残されたような気にはなりませんか。

容子 ……。

花村 震災のあと街中を歩き回りました。焼け野原に……

瓦礫の山。鉄骨だけが残った市場の跡。かつてそこに、

人の暮らしが確実にあった、サラ地の続く通り……。

まるで古い写真で見た、空襲後の街に立ってるようでした。

容子 ……。

花村 だけど日が経つ毎に、街はまたゆっくり、ゆっくりと

元に戻っていく。コンクリートの山は片付けられて、サラ地にも

少しずつ、少しずつ新しい建物が立つ。きつと街は、いつかは元通り

になるでしょう。震災前よりも、もっと大きくなって新しい街に。

容子 ……。

花村 時代が進んでいく。そのキツカケが大きな破壊であっても。

時代は、誰にも止められず突き進んでいく。

だけどその流れに乗る事ができず、とり残された人々も、いる。

容子 ……。

花村 置き去りにされた者は、その切なさをべっぴん受けてめて

生きていくのか。

容子 ……。

花村 僕はその声を形にしたい。

時代から置き去りにされた者の、代弁者として。だから――。

問。

容子 ……私は置き去りにされた女？

花村 ……。いや……。

容子 時代から取り残されて声を出せないで、身を潜めてる悲しい女？

花村 僕は。

間。

容子 帰ってくれる？

花村 ……。

容子 勝手に思い込む人、—好きじゃないから。

花村 ……。

花村 失礼なことを。

容子 ……。

花村 ……。

容子 ……。

花村 お邪魔しました。

花村、頭を下げる。

花村、上着と荷物を取り、部屋を後にする。

《夕焼け、三味線の女と花村、あの女たち》

仮設住宅群が建っている山の中から、いつしか

街の明かりを見下ろせる場所にたどり着いた花村。

街は、今夜も夜を呼んでいる。

飽きもせず。

一人、立ち尽くす花村。

タバコを取り出し、火をつける。煙を吐く。

その煙が、今日も目にしみる。

花村は、煙にしみた目をこする。

ふと気づくと、いつの間にか花村は

真っ赤な夕焼けの中に立っていた。

何気なく目線をやった先に風呂桶を持った女が立っている。

花村 ……？

女 お宅はん。……お宅はんでござる。

花村 僕はー。

女 ……違いますんか。

花村 ……。

女 (微笑み) やつぱり。お宅はん。

花村 ……。

女 あのなあ。……うち。……お風呂に行きたいんです。

お風呂にな、行きたいだけとすんやで。

……そやけどなあ、怖あてなあ。……うち、うち。

女がゆっくり黒サングラスを外す。

花村が見た女の面目は、無残に、潰れていた。

音楽が入る。『煙が目にしみる』

女 なあ。うち。

どこぞの方角へ行けばよろしおすのかなあ。

花村 ……。

女 ……なあ。

背中に忍び寄るなにかに怯えるように、東の空を見つめる女。

その姿をただ見つめる花村。

女が花村を見て微笑んだ。

しかし花村は、なかなか次の言葉を出せないままにいる。

遠くから、あの女たちが―

かつて花村の祖父と向き合った女たちが姿を見せ、

あるものは微笑み、あるものは切なげに

あのカストリ雑誌記者の孫である花村を見つめている。

向かい合う花村と女のシルエットが残り舞台は

ゆっくりと暗くなっていく。

終

参考資料／

- 「男性の見た昭和性相史PART2」(下川耿史／第三書館)
- 「みんなは知らない国家売春命令」(小林大治郎・村瀬明／雄山閣出版)
- 「神戸新聞の100日」(神戸新聞社／角川書店)